
シキのカミ

VOB

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シキのカミ

【Nコード】

N0654I

【作者名】

VOB

【あらすじ】

最近色々と忙しさ爆発な上に、物語の総見直ししながらリアルタイムで書いているもんで遅筆に磨きがかかっている状態。そんな感じでもウェルカムなアナタに贈る、エセ伝奇小説。

第一話　ぐっどもーにんぐえぶりわん

不意に夢を見る。

朝起きると忘れていたのだけれど、今になってこうして思い出す奇妙な夢。

子供の頃の……うん？

この言い方には少々語弊ごへいがあるような……。

いや別に夢の全てが実体験によるものというわけではないのだから誤りではないのか。

いずれにせよ子供の頃の僕の夢だ。

ただ、フィクション山盛りの上にちよつとばかり心臓に悪い、というか死にかけとりますがね僕！

『――』

それもそのはず、ごつそりと左肩の先を持っていかれている。

つまりその夢の中の僕は左手がちよんぱしてしまっていた。

ちなみに現実の僕のアームパーツは両方揃ってるのでご安心を。

……え、安心して誰がって？ そりゃ僕でしょうよ。

息も絶え絶えの僕は血溜まりの中に沈む。

それでも視線は外さず、その先には『彼女』がいた。

そして彼女もまた瀕死の重傷。

全身スタボ口。

血塗れの瞳は最早その輝きも失われかけている。

轢き逃げの類だと思う。

彼女を庇おうとして飛び出した僕は結局間に合わず無駄に巻き込まれる羽目に……。

……自分で想像しておいてなんだが、なにこの圧倒的な説得力。鈍くさい僕を省みれば十分にありそうな話だ。

はははは、て笑い事じゃなしに。

しかしどうにも前から思うのだがこの夢は性質たちが悪いなあと。

とりあえず自分の死に掛けていうのも不吉に過ぎるわけだが。

加えてお相手役のこの少女までどこか見知った顔なのだから気持ち悪いったらない。

しかしあえて名前は挙げないことにする、不吉というか失礼だもの。

ぐるぐると思考する意識は突然に夢の方へ向く。

みつともないことに千切れとんだ僕の腕は彼女の目の前にあった。

彼女がかぶった血の何割かは僕のものなのだろうか。

そして彼女は力もろくに入らず震える指先で僕の腕に触れ――。

すりすり。

すりすり。

「……？」

何だろう。

誰かに頭を撫でられているかのような、しかしそこで何かを探られているような。

こそばゆさと怪訝けげんさが同居しているような感覚。

「起きろーう」

「うおう」

ずびしとチヨップ一発で覚醒。

ん、朝？

いあいあ誰かに起こされるってこたあ日中でしかも学校？
参った、授業は寝ずに受けてるつもりだったんだけど……。

「……………」

あれ、布団？ 布団かぶってますぜ僕。

保健室に担ぎ込まれた覚えもなければえっちらおっちらと布団持参した覚えもないんですけど。

あー、これはまさかアレなのだろうか。

なんかこうオーラとか気とかモヤモヤした感じのパワーが集合して布団を形成？

……………。

……………ここは一つもうちょいかつちょいいのにチェンジで。

いや、ね。

そこはまあ僕も少年時代を経た男の子なわけですよ。

どうせ不思議パワー（発音はあえて訂正せず）を授かるんなら必殺技とか撃ちたいわけですよ。

ナント力斬〜だとかナント力波〜とか、…………いや待てこれはこれでイけるのではなかるか僕。

流石にと派手なことではできなくても…………例えばそう。

——布団殺法（仮）！

説明しよう！ 布団殺法（仮）とはどこからともなく取り出した分厚い布団で相手を簀^{すま}巻きに——

「起きろつちゅーてるにこの人は」

がつん、と音を立てて目の前で火花が散った。

「~~~~~!？」

「えー、今のが『必殺（笑）ヒヤツカ・ジテン』という技なわけですが」

布団を飛び出して転げ回る僕の上から声が降る。

というか何そのやつつけネーミング。

お願いだから人の頭で無茶せんでくださいな。

「角度が大事ですねい角度。入射角は45°。で反射は対象に垂直に90°。」

尚も続く必殺技（笑）の講義。

しかし殴ってから垂直に持ち上げるのは何か意味があるのかしらん？

「——んーで重力に身を任せるが如く落とす」

鬼かアంత。

そういえばさつき転がってる時に鈍い落下音がした気がしたけど、あれか！ あれなわけですかね!？

……と、まあなんやかんやの内にようやく本当に目が覚めたつばい。昔はあまり自覚がなかったのだが、どうやら僕は寝起きの寝ぼけっぷりが尋常じゃないらしいのだ。さつきまでの寝ぼけの一環ということかどうか一つ。

結局今は朝でイツツマイルーム、はてそれなら僕を起こしたのは誰ぞ？

「今度こそ起きたかなあ、トウリくん？　むう、今のご満足頂けないならヒヤツカ・ジテン（笑）との二冊流になるわけですがあ」「いや起きました起きましたって。さつきから気になってたけど」（笑）『ってなんすかあーた』

人の頭で遊んどいてそれは無いでしょうに。

そうして未だにずきずきと痛む頭を抱える僕——
——を見下ろすのは三代唯だ。
——之瀬透利——

彼女が頭を動かすたびに横にたれたツインテールがぶるぶると揺れる。

よく動きよく喋る、そして少々気まぐれなところも含め猫のような娘だというのが僕の印象。

そして件の猫少女は僕の腕をぐいぐいと引っ張りながら今も騒音を振りまいている。

「ほいさほいさ起っきる、起っきる！　朝ですよ？　朝ですよ。ビバ・モーニン！」

「ああもう分かりました分かりました、起きますってば。それで、今日は……？」

「——窓」

はて、なんのことやらと今のやり取りを他人が見れば思うだろう。
しかして僕らには暗黙の了解、というかこの御人の困った悪癖あくへきの発露つろである。

なんかこの人、毎度毎度違法手段バリバリで僕の部屋に侵入してくるんですよ、ええ。

ユイの指差した窓を見ると、鍵の横に綺麗な円を描いて吹き抜けができていた。

映画とかでたまに見るスパイがやるようなアレ。

よく見たら後ろ手に切った硝子がらす隠し持ってますしねこの人！

丸いよ。

フリスビーできそうだよ。

投げたらもれなく凶器ですがね！

修理代どーせえっちゅーねん、おいこら。

『起きたらゴハン！　ちゃっちゃと着替えて下に集合ですよー』

……などと追求する間もないのはいつものこと。

ユイの姿はとつくに消えていて声だけが階下から響いてくる。

「はぁ……慣れたなあ」

何がつて、まあ色々。

第二話 朝、来る犬と鬼（前書き）

ゆるゆる投稿二投目！。

遅筆ですがご勘弁。

第二話 朝、来る犬と鬼

ゆるゆると重い腰を上げた僕は布団をたたんだ後、制服のズボンを
はいてワイシャツに腕を通した。

その後は窓（一部破損あり）を開けて換気。

『トウリくん、さつさとなさいよこんちくしょう』

ユイが呼ぶ声が聞こえた。

こうして僕の日が始まりを告げる。

……飯にもオンナノコなんだから

「こんちくしょう」は如何なもんじゃるか。

「……いただきます」「」

声をそろえて、合掌。

ご飯の白と味噌汁の味噌の香りが視角と嗅覚の双方から食欲を刺激
する。

本日の献立は白米、味噌汁、焼き鮭、味付け海苔。

まっこと日本の朝である。

今日の朝食当番は宮下梢ちゃん。
みやしたこうえ

さっぱりとしたショートカットの髪型にはきはきとした喋りが特徴
の女の子。

ユイと同じで活発な娘だという連想は容易であるが、こっちは例え
るならば犬っぽい。

僕らの一周年下で所謂後輩ちゃんなのだが、
いわゆる

「こずつちおかわりい」

「はいはい了解ですユイ先輩。一之瀬先輩はどうです、おかわり」

「あ、じゃあこつちもお願いしていいかな」

「お任せあれっ」

先輩たるこつちサイドより大分人間できてる気がするのは気のせいだろうか？

いやあそれはともかく、やっぱりいいなあこつちの。

ユイが朝食当番ともなればアイムチャレンジャーとかぬかしてどこぞの国の民族料理とか出てくるからなあ。

そないなチャレンジスピリットなぞとうに枯れ果てた僕らはしがない小市民なのです、ハイ。

僕は便宜的^{べんぎ}にここを寮と呼ぶがこの家、実は三代家^{みしろ}、つまりユイの家の持ち物だったりする。

なんでも実家から学校に通うには歩きでは少々不便するということだそうな。

んで、娘をこちらに寄越す際、彼女の家に御厄介になっていた身である僕もこの家に招かれた。

他の二人については僕の与り知^{あずか}るところではないが、ユイと面識がある辺りそういう繋がりがあるのやもしれぬ。

しかしてこの家中々の好物件なのだ。

二階建て、風呂・トイレ・台所は共同。

しかし二階に各自個室が設けられており、中についても二人ぐらい住めるんじゃないかなかというのびのび空間。

しかも家賃がなんとゼロ円。

時折様子見に三代家の使用人である唐沢恵さん^{からさわめぐみ}が顔を出すこともあるが、基本的にこの寮に住まうのは僕ら四人だけなのだ。

しかし、朝食。

僕も作れることには作れるのだがいかんせん朝に弱い為、時折準備が間に合わないときなどは非常用のパン食になる。

まあ、そうなった場合は必ずと言っていいほどユイがぶーたれるのだけれども。

やはりそんなときでも

「次気をつけましょう、ドンマイ！」とか笑って励ましてくれる梢ちゃんには大器を感じずにはいられぬのよう。

しかし何か足りないような……他の、二人？

ユイと僕を除いてあと二人だ。

梢ちゃんと………あ。

「ところで犬秦は？」

忘れていたわけじゃない、心の奥底に格納されていたのだ。きっと忘れ去られ……もとい記憶の格納庫の隅っこで眠っていた存在、犬^{いぬ}はただけひと秦武人。

彼もこの寮に住まうメンバーの一員にして僕の悪友である。

「うん？ あー、ワンコ口なら寝てるんじゃないすか？　ぐーすかと」

「あはは……。でもユイ先輩もどうせ一之瀬先輩を起こすならお犬先輩も起こしてあげればいいんじゃない？」

「いやん、あの部屋ってなんか野生の香りしますし。マジで犬が住んでるかもしれないが犬です、あれは」

扱いは、割りと、酷い。

というか妙にユイが噛み付くだけなのだが。

「——だーれが犬だつてえー？ ああ、俺か」

そんな感じで賑やいでいた朝食の席に声が降る。
あくびをかみ殺しながら階段を下りてくる細身の長身、犬秦だ。
発言から察するにどうやら一部始終を聞いていたらしい。
それでもめげないのが犬秦である。
それ以前に気にしているかどうかすら怪しいが。

「梢ちゃん飯頼む、悪いね」

「はいはい」

「こずっち、ワンコロは放置で構いませんよ。ステイステイ」

「え」

「そうつれねえこと言うなって。ほい、梢ちゃん」

「あう」

犬秦はまるで気にせず茶碗を突き出す。

おおう、梢ちゃん可哀相に……。

不機嫌オーラを振りまくユイト、無自覚でそれを助長する犬秦との
間で見事に板ばさみになっている。

「……こずっち」

「ごごごごごごご、とかそんな擬音が似合いそうな顔と空気。
みなさーん、阿修羅さんがご降臨なしますよ！

「あわわわわ……」

こずえ はわたたしながらあたりを見回している！
……和むなあ。

「ん？ どした梢ちゃん？」

次いで犬秦。

こいつはこいつで半ば人型落とし穴のようなものだからなあ、主にくつきよめ KY 的な意味合いにおいて。

「あうあうあう……」

こずえ はなみだめで口をぱくぱくさせている！
……和むなあ。

さてはともあれ何この空気。
朝の清浄な空気をぶち抜いてどす黒いオーラが僕らの食卓を絶賛侵攻中。

発生源は言わずもがなだが。
にしても、だからアンタら鬼かと。

射殺さんばかりの視線を梢ちゃん越しに犬秦に浴びせるユイと、無自覚で他人を泥沼に引きずり倒す犬秦。
梢ちゃん涙目ですがな。

しかし、なんだ。

全くユイも大人気ないったらない。

犬秦の何が気に入らないのか知らないけれどそれを食事の席まで持ち込まんでくださいよ。

ましてやそれに他人を巻き込むのはいかんです。

さあ、ここは僕がガツンと言ってこの空気を打ち払ってやりますよ。
やるときゃーやるさ僕だって。

見てろよう、そーれ、

「ちよつと、ユイ」

「……ギロツ（ヤの付くア二さんも裸足で逃げ出すガン飛ばし）」

「——犬秦、僕が盛るから茶碗こつちぷりーず」

「おう、さんきゅなトーリ」

「はふう……」

ガツツンとやられましたね、ええ。

ガツンじゃなくてガツツン、これ重要。

「……………」

ユイの無言の圧力が恐ろしいです。

いあ、だってさあ楽しく食おうよ、飯。

「トーリ、俺おっかわりー！」

「……ギロツ（ヤの付く……以下略）」

「い……………」

犬秦少年、頼むから自重しろよ君。

ちなみに梢ちゃんはそのくさと食事を済ませて自分の部屋に逃げ込んでいたというのだから抜け目ない。

うん？ これは僕が鈍くさいだけじゃるか。

第三話 いんがーほー

あんな感じの朝の一コマから色々とすっ飛ばして放課後。
光陰矢の如し、まさにそれであると思っていたきたい。

「さて、トウリ君。途中まで一緒に帰りましょかー」

そう言つてぽむと肩を叩くのはユイだった。

別にこうしてユイと帰るのはいつものことだから問題ないのだが、

「途中まで？」

「いえーす。今日は実家の母様にお呼ばれしてるのですよう」

「ほおう、珍しい」

この珍しいというのは二つの意味を持っている。

実際、ユイが時たま実家の方に顔を出すことは何度かある。

しかしいずれも休日にユイの方から連絡を入れた後という形でだ。

定期的に顔を出す限りには今まで向こうからお呼びがかかったことなど一度も無かった。

何か口頭で伝えんといかん大事な用でもあるのかねえ……。

「まああの人のこつてすから大した用じゃないですけどねえー」

断言したよこのお方……！

僕の考えなぞ見透かしたように笑って言うが、実の親相手にそれってどうよ。

というか娘にそんな印象持たれる辺りどっちもどっちなのだろうか、これ。

「ま、そういうわけなら了解了解」

「そそそ、ついでといったてはなんですけどお、今日は寄り道せずに真っ直ぐ帰ってくださいな。ちなみにこっちはついでのついでで、いぬはた犬にもその旨伝えておいてください」

犬、てあーた。

そんなセリフ犬秦が聞いたたら怒……らないな、むしろ笑うぞアレ。
もしや、我が友は苛められるのがイイ業者（誤字にあらず）なのかしらん。

……。

「……おえっ」

「？ どーしましたトウリ君？」

「いあ、ちよつとあてられたというか何というか……」

「食あたりかなにか？ 生物以外にも飲み物とかも油断すると文字通り痛い目見ますよう！ ……牛乳とか。ふふ、ウッフ負腐」

うわあ。

なに、あの荒んだ笑い。

……我が家の冷蔵庫に牛乳の備蓄が無いのはこの辺に起因しているのやもしれぬ。

「……まあ善処しますよ」

「うむ、よろし」

——なんて他愛のないやりとりを交わしながら歩いていると僕らの横に黒塗りの車が急停車した。

まさかとは思うが、あれリムジン？

いまやそのリムジンは僕含め、周辺の皆さんの注目をバリバリに集めている。

そんな中運転席から毅然とした様子で現れた人物はユイを見て厳かに一礼した。

「お迎えに上がりましたお嬢様」

現れたのはきりつとした顔立ちの女性、唐沢恵さん^{からさわめぐみ}だった。

彼女は三代家にて当主、つまりユイの母親にあたる三代辰子^{みしろたつこ}さんの執事を務めている。

当然仕事は出来るうえ、『美しい』という表現が似合うような美貌^{ひと}を持つ字面だけ見れば大変魅力的な女性^{ひと}なのだ。

「……恵」

「はい、なんでしょうかお嬢様？」

「……………はあ」

どこか呆れ気味に問うユイにも動じず、むしろ微笑みで返す恵さん。なんか思いつきりため息を吐いているが、こっちも全く同じ気分だ……………ん？

「じーっ」

ユイさん、その視線はナンデスカ。あれですか、僕に死ねと？

そんな感じの内容を視線で問うと、

「こくん！（逝ってこい！）」

迷い無い返事が来ましたよ、ええ。

「あー、えー……恵さん？」

「はい、なんでしょうか透利様？」

後ろに束ねた髪を揺らして小首を傾げる。

一見完璧人間に見える恵さん。

だが、彼女には先ほどは言いよんだが致命的な欠点があるのだ。
そして今、その全貌が明らかになっちゃう——！

「——今日はなんのプレイですか、ソレ」

その瞬間、なんというか……変わった。

擬音にして『にこ』という爽やかな微笑みが『にへらあ』という感じの変態的な——

「よくぞお聞き下さいました透利様！！！」

「うわぁ！？」

ぐわしつと肩を掴まれて恵さんの顔がにじり寄ってくる。

怖いから！ 怖い、怖いって！！

「いえ、ね。たまたま、本当にたまたまですよ？」

それでたまたま私めの部屋に室内を埋め尽くすほどの少女漫画が山積みになっております」

「ああ成る程、その中身が執事モノだったと」

まあ、なんだ。

色々突っ込みたいところはあるけどまず一つ。

「『たまたま』で少女漫画は部屋を埋め尽くしませんでしょうよ、普通」

「『アルフレッド』って名前の執事キャラがマジステキでね！ え、何が良いつて？ そりゃあもうあの素っ気無い態度と時折見せる優しさのギャップがね——！ こういうのギャップ萌えつて言うんですかねえ！？ 車に轢かれそうになった主人公を止めようとして思わずぎゅっと抱きしめちゃった時の微かに恥らうなんかそりゃあもう！ はああああああ執事サイコー——！！ 執事成分が足りぬ、足りぬわああああああ！！ 誰か！ お客様の中に執事様はいらっしゃいませんか——ッ！？」

ああもう聞いちゃいませんよこの人。

執事成分で、執事そのものがなにを抜かしますか。あとお客様って誰のことやねん。

……というか興奮しすぎて口調素に戻ってますよ、おい。

……駄目だ、自由^{フリーダム}すぎて僕一人じゃボケを拾いきれんよ。

さて皆さん、お分かりいただいたでしょうか。

見た目は完璧美女執事、しかし中身は異次元^{トのつくヘンタイ}的変態執事——それが恵さんの実態である。

そのテンションの異常さはユイを圧倒し、犬秦ですら軽く引かせるほどの猛者なのだ。

参考までに述べておくと、前回訪ねてきたときは至る所にヒラヒラフリルを装着したメイド服。

そしてもう少し遡れば何を思ったのか某デ・ズニーなネズミの着ぐるみなんてもある。

半開きのドアからいきなりあの顔が飛び出してくる様はいつ思い出しても身震いモノだ。

——そしてまるっと一時間後——

「いやあーすいませんねえユイちゃんもトリー君も」
「うあ……」

つやつやとイイ笑顔を浮かべる恵さんに反比例して僕は大分げんなりしていた。

そりゃあ一時間フルに両肩ホールドして耳元で『執事という概念そのものへのラブコール』を延々と説かれれば気もおかしくなりますわな。

「ふううやつと終わりましたか」

対して、見事に人をスケープゴートにしてくれたこちらのお嬢様は呑気なもんである。
いつか呪うぞ。

「まあまあそんな怖い顔しないでえ。予想外に時間食いましたけど、これから家の方に行くんでトウリ君は寄り道しないで真っ直ぐ帰ってくださいねえー」

「そつえばそんな話もあつたなあ……。しっかり犬秦にもメールで伝えておいたから今頃は家にいると思うけど」

あいつが真っ直ぐ家に帰っていれば、の話だが。

……そこは下手に掘り下げても地雷でしかないので言わぬが花だ。

「んむ、重畳重畳。^{ちゅうじゅうじゅう}んでは恵、車出してくださいな」

「アイアイサー！ ユイちゃん、しっかり掴まってね。——舌
噛んでも知らないよ？」

ユイが車に乗り込む瞬間、そんな不穏な会話が聞こえた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0654i/>

シキのカミ

2010年10月8日13時11分発行